The Institute of Thanatology
死生学研究所

東洋英和女学院大学 2019年度〈公開〉連続講座

死生学の未来

❑会場　東洋英和女学院大学大学院（六本木）201教室
東京都港区六本木5-14-40

❑最寄駅　六本木駅（日比谷線徒歩10分）
麻布十番駅（大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分）

❑問い合わせ　死生学研究所 shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp

❑先着　100名様
❑事前申込み　不要
❑参加費　無料

第9回連続講座

2月15日（土）
14:40-16:10（受付14:10～）

■プロフィール
金沢医科大学医学部卒業。順天堂大学医学部麻酔・ペインクリニック科学講座、総合病院衣笠病院ホスピス、神奈川県立がんセンター緩和医療科、順天堂大学医学部附属順天堂医院がん治療センターを経て現職。神奈川県藤沢市で地域医療に従事。医学博士。本学大学院人間科学研究科（宗教学分野）修了。人間科学修士。

■主要業績
『「お迎え」されて人は逝く』ポプラ社、2014。『対話する死生学 喪失とともに生きる』ボラーノ出版、2016。「安心して生き、死に切るということ―今改めて健康観について考える―」『死生学年報2017』リトン、2017。「高齢多死社会の看取り現場からの報告」『死生学年報2019』リトン2019。『今日も、「いのちの小さな奇跡」を見つめて』大和出版、2017。『みんなで支える終末期のケア』技術評論社、2019。

奥野滋子（おくの しげこ）
順天堂大学医学部
緩和医療学研究室

死を考えることの意義
―ACP(人生会議）とは何か

内容紹介：
今後の治療・療養について自発的に患者・家族と医療従事者があらかじめ話し合うことをACP(アドバンス・ケア・プランニング)＝人生会議と言います。患者の同意を得て話し合いの結果が記述され定期的に見直され、ケアに関わる人々が本人の意向に基づいて支援することができるようにするための大切な取り組みです。しかし実際には、医学的な方針決定よりも、残された人生をどう生きてどう締めくくるかといったことが最重要課題となり、自己の死生観や宗教観、先祖とのつながりなどを見つめ直す機会となっているようです。折々に死について考えることの重要性を一緒に考えてみたいと思います。

第10回連続講座

2月15日（土）
16:20-17:50

■プロフィール
東京大学文学部宗教学科卒業。同大学院宗教学専攻博士後期課程退学。ルプレヒト・カール大学ハイデルベルク修了（Dr. phil.）。専門領域は宗教学、死生学、アッシリア学（メソポタミアの楔形文字文献学）、旧約聖書学。東洋英和女学院大学助教授を経て1998年から現職。

■主要業績
「洪水神話の文脈―『ギルガメシュ叙事詩』を中心に」『宗教研究』373、2012。「『ギルガメシュ叙事詩』の新文書―フンババの森と人間」『死生学年報2016』リトン2016。『エサルハドン王位継承誓約文書』リトン2017。

渡辺和子（わたなべ かずこ）
本学人間科学部教授

古代の死生学から未来へ
―『ギルガメシュ叙事詩』の解読を通して

内容紹介：
世界最古の長編叙事詩『ギルガメシュ叙事詩』が〈本当は〉何であるのかという問いに突き動かされてこの十数年を生きて参りました。大学での授業「神話と物語A」、死生学研究所の公開講座、『死生学年報』の原稿執筆などをさせていただくうちに、この物語が持つ層の厚さに気づくようになり、さらなる深みへと導かれました。最も古い文書としての楔形文字文書によって「古代の死生学」が書かれ、それが現代人に読まれることによって、未来の人々に伝えられてゆくという通過点に私たちが置かれているように思います。今回はその思いの一端を私の最終講義として聞いていただければと願っております。

〈2020年3月刊行〉東洋英和女学院大学死生学研究所編（リトン刊）
『死生学年報２０２０　死生学の未来』
定価2,500円＋税　一般書店でご注文・ご購入いただけます。

Toyo Eiwa University
since1989